

湖水はあくまでも浄く、漁師は湖水を飲料とした。この状況であったから汽水域からの逆行魚も多く、シャジャ（魚類の自然餌）の繁殖状況も旺盛だったので淡水魚の一方km当りの漁獲高は全国一を誇っていた。当時常陸川下流方面に於ける潮の差引は六〇cmから、ときには一m近くに達する場合も見られた。これは利根川を流下してくる水勢と、河口からくる潮流の変化によるものであり、上げ潮時には比較的流下水勢の弱い常陸川に浸入して向浦の湖芯にまで達していた。これが両浦特有の自然の条理であり、ここに漁業の繁栄が見られたわけである。

ところが昭和三十年代に至り、干拓や埋立による耕地の造成が進むにつれ常陸川沿岸を始めとする水郷地帯の水田約三〇〇町歩に殖えた早苗が塩害により枯れ始めてその大半が全滅するという事態が発生して、毎年春の田植期からその直後に塩害を見るに至った。

当時は食糧増産施策の推進時代であり、海水の流入を喰い止めて水田を塩害から守り、水位を調節して農業と漁業を両立させ治水の面から、調和とる方法として逆水止水門が完成操作を見るに至った。この運営に当り、利害関係者である町村当局と漁、農の三者があい寄り常陸川水流調整対策協議会が誕生して、その運営規約が定められた。それによると、四月八月に至る灌漑期と十二月

三月の渇水期には通常水門を開いているのであるが、月二回の大潮を中心にした五日間は水門は閉められる。その結果九、十、十一月の三ヶ月間とこの月以外の四十五日間つまり年間にして：百三十数日は、閉めきられ、其の他の日は開放されることになった。

以上が常陸川水門の開閉日であり、これによりその目的は概ね達しられていたので鹿島工水の需要に應じるために造られたものでないことは時代的に見てもあきらかである。その後鹿島工業都市が操業を見るに至り、工水の消費量は一日二十一万トンに達した。これが為に水門閉鎖が続き、漁、農両立と云う水門建設の目的は失なわれるに至った。今夏は特に渇水したので、工業用水の確保に重点が置かれ、水門の閉鎖が続いたので湖水は極度に悪化して漁業者に大きな打撃を与えた。小割漁業に於ける鯉の大量死も水門の閉鎖が直接、間接に影響しており、後から操業を始めた鹿島工業の為に、水門が締切られ、前者である漁業が危機にひんする。これでは企業独善政策と言わざるを得ない。

◇ 社撰な工業要水計画 ◇

岩上構想から発展したと云われる、鹿島港臨海工業都市の建設に際しては勿論宝山水門築造の目的とは関係な